

スリランカのコミュニティー津波博物館を訪問しました(2018/5/25)

テーマ：津波博物館、国際連携
場所：スリランカ ヒッカドゥア地区

2018年5月25日(金)、当研究所 情報管理・社会連携部門 社会連携オフィスの小野裕一教授はスリランカ南西海岸のヒッカドゥア地区にあるコミュニティー津波博物館を訪問しました。スリランカは、2004年12月のインド洋津波で死者・行方不明者4万人を超える犠牲を払い、これはインドネシアに次いで多い数でした。首都コロンボからゴール(ゴール県の首都)へ向かっていた列車がヒッカドゥア地区で津波に遭遇、脱線転覆し、乗客・乗員・地元の住民も含めて1000人以上が死亡しました。津波の第一波で列車が転覆を免れたために、浸水の被害を受けた付近の住民が列車は安全と思い殺到したところを、第二波が襲ったと言われています。この地域での犠牲者数は2500人以上。2005年6月に国連の視察団の一員として現地を訪れた小野教授は、転覆した車両や破壊された家屋を目のあたりにしました。海岸平野が広がり、高台や高い建物もないので、津波の避難のためには内陸に逃げるしかありません。13年ぶりの訪問で、どのように復興されているのかにも関心がありました。

コミュニティー津波博物館は、現地で救援や復興のボランティアとして活動したオーストラリア人の人道援助活動家アリソン・トンプソン氏が設立し、博物館の隣に住むプリヤンティ夫妻が、毎日朝8時から夜8時まで入場無料で訪問者を受け入れています。プリヤンティさんは、昨年11月に石垣島で開催された世界津波博物館会議にも出席されました。博物館と言っても平屋の小さな建物で、展示物も写真やパネルが中心で、日本のそれとは比べものにならないくらい質素ですが、自らも被災者で肉親を津波で亡くしたプリヤンティさんが熱心に説明してくれました。博物館には学校の子供達がたくさん訪問するようで、一度に多くの子供達を受け入れるスペースがないことが悩みだそうです。また、外には二艘の津波で被災したボートがありますが、雨ざらしになっていました。本当はケースに入れて展示したいのだそうです。そして、奥の間の壁一面は白いカーテンで覆われていて、津波で亡くなった方の遺体を含んだ写真が展示してあります。訪問者がショックを受けないようにとの配慮で希望者にだけ見せていました。変わり果てた子供さんの遺体の前で絶叫している家族の写真の前では、涙を禁じ得ませんでした。肉親や友人を災害で失う気持ちは、スリランカであろうと日本であろうと変わるものではありません。二度とこのような悲劇を繰り返さないために、再度襟を正して取り組んでいかなければとの思いを強くしました。

博物館での滞在は帰国時間の都合で夕刻の1時間程度だけでしたが、大変意義深い訪問となりました。世界津波の日を契機として縁を結ぶことができたこの出会いを大切に、災害研としてもできることを検討していきたいと思います。



コミュニティー津波博物館にて